

新刊紹介

『綴方十二ヶ月』

(芦田恵之助著)

幻の名著と言われた『綴方十二ヶ月』が、古田抵、野地潤家両先生のご尽力によって、広島文化評論出版から復刻・発行された。この復刻には、別冊として『綴方十二ヶ月の意義と価値』がそえられている。

別冊の巻末に付された「芦田恵之助綴り方教育年表」(野地潤家先生編)によれば、『綴方十二ヶ月』の発行は、

大正六年(一九一七) 四四歳

○『綴方十二ヶ月』(二月の巻) (二・二二、育英書院刊)

大正七年(一九一八) 四五歳

○『綴方十二ヶ月』(三月の巻) (三・二〇、育英書院刊)

○『綴方十二ヶ月』(五月の巻) (七・二八、育英書院刊)

○『綴方十二ヶ月』(七月の巻) (九・二〇、育英書院刊)

大正八年(一九一九) 四六歳

○『綴方十二ヶ月』(九月の巻) (七・三〇、育英書院刊)

となっており、原本は五巻であるが、復刻では、それを一冊にまとめ、さらに巻末には索引がつけられている。この巻末索引と別冊とは、復刻の意義をいっそう高めている。行き届いた配慮というほかはない。

別冊の執筆者は、藤原与一先生をはじめ、つぎのかたがたである。西尾実、波多野完治、大村はま、宮本常一、石井庄司、井上敏夫、倉沢榮吉、滑川道夫、西原慶一、望月久貴、野地潤家、藤田圭雄、古田足日、森信三、中内敏夫、重松隼泰、上田薫、青木幹勇、伊達兼三郎、鶴見俊輔、教沖垣寛、古田抵(目次順、敬称略)

本書は、児童用図書として書かれたと言われているが、復刻された今日はもちろん、当時においても、その意義なり、価値なりは、それこそ「道の眼」(二三七ページ)を持つ人々によって、深くも高くもたらえられてきたのである。今日、どうとらえられているかは、別冊によって、じゅうぶんにかがいがい知ることが出来る。

本書のしくみは、毎週土曜日、里川という老先生を中心に、小学生の大山太郎・野中花子・春山芳夫・山川清と、近所の小学生の敏子(三月から参加)、それに子どもたちの父母(里川先生のかつての教え子)、松山先生(大山太郎たちの現在の先生)、ときには、里川先生夫人も参加しての、「文章二葉会」という綴り方勉強会を展開していく形になっている。子・親・教師ともどもの勉強会であるために、文章の学習が奥行き深いものになっている。

この書から学ぶことは、とりわけて、読み手の力に左右されるように思う。それは、本書のしくみからくる奥行き深さにもよっている。別冊の中で、波多野完治氏が、「天下の奇書」と言っておられるが、「奇書」であることの、今一つの意味合いは、ここにもあると思われる。

本書は、文章の道を説きつつ、全体がまた、文章の道のすぐれた

実践例なのである。書中に文章の道を説けば説くほど、著者にとつても、それだけ、この書の構成と表現はきびしくなっていくたはずである。まさに「修養」(一二ペ)なのである。七月の巻の第二回では、その「修養」が、文題として正面にとりあげられている。そこにおいても、春山芳夫の父のことばをとおして、道の本義が巧妙に述べられている。「今日の文は女の方が勝ちだ。敏子さんのでも、花ちゃんのも、かなり骨が折れてゐるが、清坊や太郎君や、芳夫のは、ただ聞いたまゝを写したといふだけだ。苦勞は話す人にあつても、写したのものにはそれはない。……」(二七九ペ傍線筆者)「修養」を書きながら、「書くこと」そのものに「修養」がないとすれば、道の本義をはずれたものになってしまう。こうして、道の本義をつらぬくことが、この書の一の骨格をなしている。

この書はまた、読者に「修養」を求める書でもある。老先生が示す文例や会員たちの書いた文例を読んで、読者が、それについて言いつることを書中の人物たちとともに考えてみざるをえない運びになつてゐる。幾重にもしかけられた網の目をくぐり抜けて行くよくな骨折りをさせられるのである。

『綴方十二ヶ月』は、ただに「綴方」の書ではないことを諸家は指摘している。「国語教育」の書であり、「教育」の書である。そして「人生」の書である。

○ 「三月の巻第三回病氣」の項には、つぎのような一節がある。

病は苦しいものである。けれども之を悪んではならぬ。坊の「病氣」といふ文は、全く腎臓炎のためものである。坊が今

までに書いた文の中で、これほど鋭い文はなかつた。坊には鋭い文が書けないのではなく、鋭く書くべきことがなかつたのである。

坊の腎臓炎は、坊に鋭い文を書くことを教へた。強い苦痛を強く書いて、自分にいふべからざる満足の出来ることも教へた。坊は腎臓炎の苦痛を、たゞ苦痛とのみ考へてはならぬ。腎臓炎にかゝらなければ、腎臓炎の苦痛を知ることが出来る。

病氣は苦痛であるけれども、綴方のためには親切なる教師である。一切の快樂苦痛を、綴方の教師と見るやうになつて、始めて綴方の真の味はわかる。坊よ、病を悲しんではならぬ。

お父さんは

「老先生面白い文ですが、大山の坊に分りませうか。」

とおつしやつた。老先生は、

老「分るだけ分る。」

私は之をきいて、何といふ奇抜な言だろつかと思つた。

清「老先生、これは手紙ですか。」

老「さうよ。」

清「学校でならふ手紙とはちがひますね。」

老「学校では、かういふ文を手紙とはいはないか。」

松山先生はこの時、

「今までにかういふ手紙を教へたことはありませんが、うかがって見れば、全く手紙です。」

とおつしやつた。

「みんなが怪しく思ふも無理ではない。私は大山の坊が書いた病氣といふ文について、感じたことを、坊にむかつて述べてゐるのだから、手紙であるが、書いてゐる事柄は、普通の綴方であるから、手紙のやうには思はれないだらう。」

とおつしやつた。(二二一—二二二ペ)

この一節をとってみても、『綴方十二ヶ月』を著わしたことの画期的な意義と、著者に何が見えていたかが明らかであろう。

著者は、本書のはしがきに言う。「捉はれたる我が國文、弄ばれたる我が國文、さる國文を、國民の眞生活に強く結びつけたる眞國文となさんがために。」と。「病氣」も「手紙」も、この予期をになつてゐる。

(『綴方十二ヶ月』A復刻版V、B6判、三七〇ペ、上製本、

『綴方十二ヶ月の意義と価値』、B6版、二三〇ペ、別冊共一八〇〇円、文化評論出版株式会社) (中列正體)